



子
供
讚
歌
(四)

倉
橋
惣
三

三
子
供
道
樂

1 實驗室外の街の子

子供道樂という言葉は頗る穩當でないかもしれない。元來道樂という語義がどういう意味か知らないが、こゝでは道で樂しむと讀んで貰いたい。元來ひとりつ子であつた彼には弟も妹もない。幼少の子供と樂しむには、自然、家の外のほかはない。道で樂しむということにもなる譯であつた。

彼は角帽のまゝ、よく淺草公園に出かけた。彼自身が子供の時、公園近くの馬道小學校にいたことのある淺草趣味(?)もあづかつていたかも知れないが、當時の淺草公園は極めて無邪氣な子供の世界であつたから、子供と樂しむには最も格好の場所だつたのである。先づ仲店のおもちゃ屋に軒並み母親の袂をひつばつている子供ら。仁王門から御本堂につゞく鳩の群れに豆をまく子供ら、階段を左におりて瓢たん池に沿うてゆく道の砂繪、いあいぬき、ゴム管を一人々々耳にあてゝ聽く蓄音機、それから、花屋敷の大看板、その後高い十二階、また左へぞろ／＼と廻つて、江川の玉乗り、色幕をあけたりさけたりしながらブカ／＼ドン／＼はやし立てるさま／＼の見せもの。今のような大けさな映畫館や、醜いエロ看板などの一つもなかつた、上品とはいえないが、たわいないチルドレンス コーニー アイランドであつた。彼は如何にチャイルヂッシュとはいえ、そうした見せものそのもののファンというのではなかつたが、それを樂しむ子供らの群に交つて、ふんだんに子供を樂しんだのである。サーカスでは子供らの席の隣

の椅子を選んで、いつしよに手をたゝいた。十二階では貸し違目がねを子供に又貸ししては、あすこに帯の様に流れるのが隅田川、そのずつとさきに霞んで見えるのがお臺場、坊やおうちほどの邊だらうねなんかと、説明掛を買つて出ては子供らと話をした。どの子供も親がついていけるのだから、やたらに話しかけることもできない。そのきつかけを作るのには一通りならぬ苦心もあつた。角帽のおかけで人さらいとは思われぬだらうが、さつさと子供の手をひつばつてゆく若いお母さんなどは、屢々に、手であつた。雷門の角のおこし屋で仕入れて来た用意の献上ものも、なか／＼受取つてくれないし、そうかと思うと、瓢たん池の鯉にやる数を子供らに配つて、道樂資金をはたかせられることもある。パリの公園を散歩するのに、いつも子供にやる小さい飴菓子やポケットに忍ばせていたという或る文豪の話を後に讀んだことがあるが、それは子供らを喜ばしてやろうという心、彼のはそれを手づるに子供と楽しもうという下心が混じているのだから逸話にもならない。が、そうした淺草公園の午後は、彼にとつて、仲店裏のうめ、そののぜんざいよりもスカートなものであつた。

當時(明治の末)の東京には、子供向きの娛樂の機會がいろ／＼あつた。というよりも、おとなの娛樂が子供にも適したといつていゝかも知れない。おとなと子供と共通の娛樂ということは、現代のレクリエーション論として一つの問題になるが、特におとなだけの慰安は別として、社會的には、それが共通でもあんまり差支えない程度に、おとなの娛樂に稚氣が多かつたのである。或は、當時の社會的の娛樂の客寄せの主な對象は子供で、おとなは子供のつきそい、同伴者、更に往々、子供をだしに使つて楽しむ子供のような大供であつたと見れば、むづかしい問題もあるまい。その、つきそいでも同伴者でもない、又必ずしも、子供をだしに使うてぶらつく與太郎でもないが、そうした機會を拾つては、街の子供と楽しみを共にしに出かける彼であつた。

年がら年ぢゆう、子供にとつて魅力であつた淺草は別として、常設的でなかつたことも當時の子供娛樂の特色であつた。それがレクリエーションとしていゝことかどうか分らないが、一段のたのしみを添える要素であつたことは確かである。少くも、子供らはそれを待ち楽しみ、迎え楽しんだ。彼も。

そのいろ／＼の中でも、毎年彼の子供道樂を満喫させたところの一つは、九段の招魂祭だつた。當時、神田明神さまでも、赤坂の氷川さまでも、御祭禮といえ、子ども相手のおもちや店、駄菓子店、とり／＼の見せもので賑わうこと、村の鎮守祭りと全く同じ光景であつたが、こゝ九段の官幣大社靖國神社の祭典も全く同様であつた。石の大鳥

居から正面本殿への兩側は、賣りもの店にしても、たべもの店にしても、てんと張りの見せもの小屋にしても、とても東京市麴町區とは思えない田舎に充ちたものばかりで、従つて御境内どこへ行つても日なた臭い子供臭が漂つていた。猿芝居の忠臣藏、山雀の藝當の葛の葉などは、動物愛護論は別として子供らといつしよに鑑賞(?)して至極くほゝえましいものであつた。但し彼の目はそれらの劇藝術よりも、それを觀ている子供らの顔の方に向つてゐるのだから、實は子供らの喝采に做つて喝采する間のぬけ方だつたが、それにしてもおとなよりも子供の方が、舞臺のエテ太夫やヤマガラ嬢の藝道修業に深く感心し、且つ小動物の生活苦に切に同情することの、如何に顯著なのかに驚嘆させられるのが常だつた。

斯うして、彼の子供道樂は、いつまで續いたか、どの位の範圍に擴がつたか、ボルターヂュは残つていないが、ラポラトリーの實驗機械の前に置いてみるのとは別の、自然のまゝの子供を知る機會であつた。人生到るところ子供あり、子供のいるところ幸福と歡喜ありだ。

2 一年志願兵と村の子

彼は都會育ちである。農村の子供の生活を知らなかつた。それが圖らず村の子に多く觸れることができたのは不思議な御縁からだつた。彼は大學を卒業した年の暮一年志願兵として入隊した。その一ケ年は兒童研究者として空費に似たものだつた。フレibelは軍旅に従つたとき、生涯の幼兒教育協同者ミッテンドルを得た。彼は入隊したぐけで、眞劍の戰爭に参加した譯でないから、そうした眞劍の報酬を與えられなかつたのも仕方がない。しかし、人生到るところ子供あり、子供のいるところ幸福と歡喜ありだ。

子供は兵隊が好きだつた。軍國主義的理想の一つのあらわれだつたかも知れないが、心理的解釋を試みてみれば、兵隊(軍人として立とうとするのでない只の兵隊さん)は、その期間しやばの俗氣を離れた虚心坦懷の心境にあつた。それを少しくきどつていえばインノセンスである。インノセンスは子供の心である。そこに兵隊が子供に好かれるポイントがあつたのであろう。虚心坦懷は風流の道でもある。彼は此の期間ほど和歌を澤山詠みすてたことはいない。軍歌を唱いながら和歌をつくり、直立不動の姿勢で腰折れをつくるのは似合わしからぬことのようにだが、敵襲の心配のない歩哨の稽古に立つていながら、目の前に刻々と色の變つてゆく、春の曙の富士の美しさを見たり、黙々と

歩いてさえいれればいゝ月夜の行軍演習に、すゝき廣野の秋の白露にぬれたりしながら、呼吸が何ごゝろなく三十一文字のリズムになつたとて、咎められることではなかつたろう。又、村はづれでの演習の休憩中に寄つてくる子供らと同じインセンスで話をし、里の農家に宿營の夜、障子の破れ目からのぞく幼い子ら呼び入れて遊んでやつたからとて、別段軍律に反したのではなかつたろう。その他、野外演習中の糞食や休憩の時間は、いつでも村の子に包圍されていたといつていゝ。

村の子らは、初めのどつつきは悪くても、眞純だ。口はまづいがこつちの話はよく聽く。作法はないがデリカシーがある。おうようでもないがこすくはない。尊敬ということとはよく知らないが、人を馬鹿にするということはない。それよりもかによりも、神經がびり／＼していない。——彼は村のおとなの、いわゆる朴訥、正直、眞實には屢々眉につばして警戒することを忘れない。しかし、村の子供は垢つぽい顔に、しみ／＼ときれいな目を見つめることが多い。おとなの美は眞の洗練を経て初めてあらわれるが、子供の美はナイーブそのものにあるということ、兵隊さんとして交わる村の子において、つく／＼思つたりした。そうして、町の子と村の子と、子供として勿論かわつたことはないが、村の子の方が子供として幸福なこと、村の子にこそ『おさなごの貴さ』が見出されるのではないかと思つたりした。更に、町の子ばかりに接していると、最も生なまの子供というものを見失つたり、見そこなつたりさせられるくもりが、われ／＼の目に起りかねまいと思つたりした。

序に、彼の聯隊生活の記憶の中には、見習士官になつてから、度々將校集合所で、將校婦人會のために、兒童心理に關する講演を命ぜられたことがある。これは子供道樂の思い出とは別の項に屬するが、歩兵操典や圖上戰術で油をしぼられるのとは、ちよつとちがつた『學科』だつた。夫人達が母としてかわりないことは素よりとして、日頃いかめしい佐尉殿を、いゝお父さんとして想像してみ得たことは、坊ちゃん嬢ちゃん達のおかけだつた。

街の子でも村の子でも、可愛いさにおいてかわりはない。環境による表層の相違はあるとしても、子供は常に子供だ。たゞ、こつちが子供のような心で接すれば、どんな子供も子供というものを打ちあけて見せてくれる。兒童研究の實驗室や、兒童教育の教室のほかに即ち學者や教師としてゝなしに街の子や村の子と道で樂しんだことは、彼にとつて捨て難い意義をもつた。幾度も繰返してきざに聞えるかも知れないが『人間到るところ子供あり』今一人々々は思ひ出せない途上の子らと野原の子らよ。君達をも、この讃歌のうちに忘れてはなるまい。